

〈特集〉
外国雑誌の流通
と購入方式

洋雑誌の購入
—スエッツ(ファースト方式)を導入して—

山口 佐保

1. はじめに

病院図書室での洋雑誌購読をとりまく環境はここ数年大きく変化してきた。

まず、年間購読料が毎年のように高騰していることである。これは日本総代理店扱い雑誌の増加や、消費税導入後の諸物価の高騰などが大きく影響していると思われる。しかし、雑誌購読料の高騰とは逆に、全般的に病院経営は悪化の方向をたどっている。このため非生産部門の図書費予算は減りこそすれ増えることなどまず望めない非常に厳しい状況である。また、書籍に代わる電子出版物も普及し始め、その上医学分野の情報自体の変化もさらに激しくなっている。そのような中で司書は、利用者の立場、図書室のレベル維持という観点から、購読誌数の減少はなんとしてもくい止めたいと努力しているのである。ところが、現実にはそれら電子出版物などの新しいメディアや情報の変化に対応するために、図書費の一部をハードウェアのグレードアップにまわす必要にも迫られる。結局そのために購読誌数を減らさなければならない、四苦八苦しているのが現状である。

次に到着、受入の問題である。今では医学情報はオンラインデータベースやCD-ROMなどで、より新しい書誌情報を逐次得ることができる。昔のように雑誌発行後2、3カ月以上も遅れての到着では間に合わない。もちろん未着、破損などで遅れるのはもってのほかである。

クレーム処理については、図書室担当者→書店→総代理店→出版社のルートが一般的だが、この方法では担当者からクレームを出すまで何の対応もされない。気づいた頃には時すでに遅く、クレームを出して手に入れるまで2、3カ月～1年近くかかり、司書にとって頭痛の種である。またほとんどの病院図書室司書は、担当者1人、そのうえ兼任ですべての業務をこなさなければならず、忙しくて雑誌受入チェック、クレーム処理に十分な時間が割けない。

このような厳しい環境の中で救世主のように現れたのが、スエッツなど主に外資系企業のサービス方式である。当室では関西の病院図書室としては初めてスエッツ方式を導入したが1年余り経過した今、導入のいきさつ、現状報告などを述べてみたい。

2. 導入のいきさつ

当室では、1993年度現在131誌(一部年刊ものなどの逐次刊行物も含む)の洋雑誌を購読している。1992年度のスエッツ導入以前は3書店から毎年翌年の見積書を提出してもらい、司書が価格比較一覧書を作成する。価格交渉は会計課用度係が行い、各書店の誌数配分を決めていた。実際は、毎年契約先を変えると未着事故が起こりやすいということで3書店の誌数配分は変わらず、いかに安くさせるかの値引き交渉後、契約という流れになっていた。

スエッツ導入の前年、クレームが多発し、その

処理の遅さに業を煮やした私は、ふと雑誌「医学図書館」に大きく広告を掲載しているスエッツのことが頭に浮かんだ。日頃から“日本向け価格”については不透明な部分が多く納得できなかったことと、購読料定価が軒並みアップしたことが重なり、その上未着クレームの対応の悪さとあわせて不満を抱いていた私は、思い切ってスエッツに電話してみようと考えたのである。

3. 導入に際しての検討事項

(1) 信頼できるどころか

スエッツについては広告内容以外何も知らない会社で、今までと違ったシステムなので本当に信頼できる会社なのかが第一の検討事項であった。この点に関してはスエッツから導入後すでに4、5年経つ関東の病院を2、3紹介してもらい、直接電話で実状を聞いた。その結果、会社としても信頼でき、システムもトラブルが少ないということであったので、検討を進めていくことにした。

(2) 価格はどうか

会計に対しては、価格面で納得できるものがないければ、今まで長年つきあってきた業者を変えることは認めてもらえない。今までの方式と全然違うので単純に比較することはできないが、1991年度の実績で全購読誌の合計を比較したところ、スエッツの方が100万円近くも安くなり、会計サイドからは何も問題なく全部変えても良いと許可を得た。

(3) サービス内容はどうか

スエッツの広告で一番興味をひかれた点は雑誌が速く、確実に、欠号もなく届き、受入作業が楽になるということだった。図書室担当者としては価格面にまして重要な問題であり、本当に広告の通りであればぜひ導入してみたいと思ったのである。実際の具体的な内容については導入後の評価の項で述べる。

4. スエッツ方式採用の理由

スエッツ導入を検討している時期に、丸善、紀

伊國屋からも類似方式のパンフレットをもらったが、価格面で今までとは変わらず、システム自体が新しく実績がないのが不安であり採用しなかった。スエッツは会社設立から90年余りの実績があり、すでに導入している病院図書室の評価も高かったため、スエッツ導入を決定した。

5. 導入にあたって

1992年度購読分よりスエッツ導入することが決まったが、初めの1年間は90誌をスエッツと契約し、様子を見て良ければ翌年から全部スエッツに変更することになった。というのはいきなり全部をスエッツに移行することは危険でもあり、今までの書店との取り引きも単行書購入等の際は継続されるからである。90誌の内訳は洋雑誌購読の取り引きしかなかった1社の分全部と、残り2社のそれぞれ半分程度である。

またスエッツの支払いの最終期日は原則的に10月1日だが、支払いが早ければ早いほど割引適用がある。スエッツの担当者呼び、用度係長も交えて何回かの打ち合わせの後、9月に支払うことで契約を交わした。

6. スエッツ方式の評価

導入後1年余り経過しての評価については、スエッツからの資料「スエッツ・ファースト・サービスの内容とメリット」に沿って、当室での実状と感想を述べていきたい。

(資料)

- (1) 図書館での受入作業が楽になる。
 - ・雑誌がそのまままとめてパッケージに納められているので、1つ1つ開封する必要がない。
 - ・受入作業は通常1週間に1度ですむ。
 - ・パッキングリスト(納品リスト)が付いている。
 - ・バーコード・ラベルを利用した受入チェックが可能。

(実状)

当室には1週間に1度(水曜日)、箱入りで到着する。図書室までの配達が原則になっているのだが、当病院の場合郵便物・配達物すべての受取窓口が庶務課集中になっているので、たしかに1つ1つの開封の手間はなくなるが、逆に庶務課から図書室に持って上がるのが結構重くてたいへんである。また箱の中に誌名順には入っていないので、いったん全部出した後、誌名順に並び変えてパッキングリストと現品を照合しなければならない。1週間分の雑誌なので数が多く、手間がかかる。誌名順に箱にいれてもらうのはオプションで年間総合計金額の1%上乗せになるそうだ。輸送中の破損もたまにあり、これはパッキングリストの照合の際チェックしてこちらからクレームしなければならない。この乱丁クレーム分はすぐに来るとは限らず、昨年出して未着の分がまだ若干残っている。

またこれは最近聞いて知ったことだが、送付される雑誌の表紙にバーコード、雑誌名、巻号などの記載されたシールが添付されており、その各シールに図書室独自の誌名コードを入れてもらうことができるらしい。雑誌受入をコンピューターで処理している図書室にとっては、ひとつひとつ誌名コード表を見る必要がなくなり、大変便利なサービスだと思う。

(資料)

- ・磁気テープやフロッピーディスクによる受入も可能。

(説明)

毎週送られてくる荷物の中にパッキングリストが付いてくるが、希望があればそのリストと同じ内容がテキストファイルの形で磁気テープ、フロッピーディスクに入れて提供される。スエッツでは現在汎用コンピューターでの磁気テープによる自動受入に対応している。自動受入とは指定の図書館用パッケージソフトを利用して、スエッツから送付されるテープやディスクをコンピューターに入れるだけで受入処理が済むシステムだ。今年4月からはオフィスコンピューターレベルで

ディスクによる自動受入にも対応する予定だそうだ。当室では行っていない。

(資料)

- ・予算別、研究所単位でのパッキングリストの作成、パッケージの分割納入もできる。

当室では行っていない。

(資料)

- (2) 雑誌が早く、確実に届く。
- ・全タイトルをエアカーゴで搬送(10日-2週間)。搬送頻度は図書館の都合に合わせる事ができる。(最多頻度: 1週間に1回)。
- ・Door to Doorの配送サービスで紛失事故はゼロ。

(実状)

確実に届くので安心できる。到着は以前に比べて早くなった雑誌もあるが、反対に少し遅い雑誌もあり、全体に非常に早くなったとは言えない。

また通関手続きの都合、フライト・スケジュール変更、オランダと日本の各休日、年末年始の影響で配達日の変更され、1週間空いて2週間分が一度に送られてくるのが年に数回ある。この年間スケジュールの変更は毎年2月に日本スエッツから連絡があり、臨時変更分はそのつど事前にFAXで知らせてくる。

(資料)

- (3) 国際水準価格は廉価である。
- ・現地発注のため、版元国内価格が適用される雑誌がある。
- ・システム化により図書館内のコスト削減に貢献できる。

(実状)

価格は確かに以前より安くなった上に、サービス内容が充実している。

支払方法は、10月1日までに推定価格で支払い、

翌年の春確定価格が出た時点で過不足分が精算される。精算方法は、次年度年間購読料支払用に使用するか、その場で精算するかが選べる。

ちなみに当室の場合、'92年度は50数万円プラスだったので、'93年度購読料支払い時にその剰余分を差し引いてもらい支払いをした。

(資料)

(4) 図書館での未着、欠号のチェック不要。

- ・スエッツが受入を行っているため、雑誌が届く前に、欠号・未着・遅延の常時監視と自動クレーム・システムで自動的に版元にクレームされる。

- ・欠号が少なくなる。

過去十数年にわたるタイトルの受入記録があるので、未着や遅延が早期発見できる。また、発注数と受入数を常に監視しているので、版元よりの送付ミスも、速やかに発見できる。

(実状)

今までの欠号処理の苦勞から抜け出せると大変喜んだが、1誌契約初年度に付いてくるはずの肝心のバインダーが一向に送られてこず、数カ月にわたりこちらからクレームを何回も出す羽目になってしまった。このときのスエッツの対応は今までの書店のクレーム処理の対応と同じだったため少しがっかりした。これは版元の責任のようで、今までの書店に頼んでも同じことになったかもしれないが、全面的にお任せするというのは無理で、こちらでも一応受入時にチェックすることは必要だと痛感した。その他、Supplementでこちらからクレームした雑誌が1件あった。

もっとも以前に書店に出しているクレーム、'91、'92年度分でまだ未着の雑誌があることを考えると良い状態になったのかもしれない。それ以外はおおむね良好に処理されている。

(資料)

(5) 受入状況の報告が詳細。

- ・隔月毎に納入状況報告書の提出。

当年度に納入した雑誌のすべてがタイトル毎に累計的に記載される。

12月の報告書はその1年間の年間累計記録となる。

- ・次号の納入予定の連絡。

- ・変更書誌データの自動連絡。

(実状)

納入状況にはいつ送付したか、クレーム中か等が分かり参考になる。次号の納入予定、変更書誌データの連絡はこちらから聞いてはじめて回答がくる場合が多かった。

当室では利用していないが、オンラインを行っているところであればスエッツのデータベースと接続し、手元のパソコンからタイトルの検索、書誌事項のチェック、出版状況の検索がダイレクトに行える。

7. おわりに

スエッツを利用してみて、すべてが宣伝の通りすばらしく良かったわけではなく、2、3の問題もあった。しかし、価格が安い上に今まで司書がやってきた煩雑なクレーム処理などをやってくれるので、利用者に確実に資料を提供できるという点では導入して良かったし、今後もスエッツを利用していかうと思っている。

病院経営が曲がり角にきて、図書費予算が厳しくなっている中、これからはスエッツを利用する図書室も増えてくるだろう。いままで旧態依然の方式でやってきた日本の業界が、スエッツなどの外資系企業の新流通方式の出現によってあわてて新方式を発売したというのは皮肉なことだが、お互いによりよいサービスをめざして良心的価格で提供してくれればユーザーにとってはありがたいことだ。ユーザーは、その中で各自の図書室にあったシステムを見つけて利用して行けば良い。今後これらの方式がどのように変化していくか、注意深く見つめていきたい。

なおスエッツへの問い合わせ先は下記の通り。
TEL. 0120-12-0701 (フリーダイヤル)